

ここ数日の北海道では酷暑と言えるような暑さも、明日からは一転、気温も低くなりそうである。十勝の夏も終わりではないかと危惧する土地の人も多い。このようだと、歴史的な大豊作だった昨年とうって変って、十勝の農作物にも多大な影響が出そうだ。(8/6 記)

自衛隊員 25 万人のマドンナと自他共に認める、歌手で、作詞・作曲家でもあり、且つライターでもある吉永光里さんが、来帯して、部隊のインタビューに、防大吹奏楽部の指導に、帯広駐屯地の夏祭り参加にと八面六臂の活躍をしている。今年 3 月に引き続いての来帯である。



(帯広駐屯地夏祭りで、5 音、防大吹奏楽部をバックに熱唱する吉永さん)

I 吉永光里さんのプロフィール

佐呂間町出身、蟹座、AB 型の彼女は、音感が発達すると言われる 3 歳からピアノを習い始め、音楽高校から音楽大学へと唯只管(ひたすら)に厳しいレッスンに打ち込んだ。この間、クラシック以外の音楽の面白さ、作曲の面白さに目覚めた。

大学を優秀な成績で卒業しオペラ歌手への道を歩き始めた。が、偶々(たまたま)始めたピアノの弾き語り、更には劇中音楽、CM ソングも手がける等活動領域を広げた。各種のコンテストに参加、大きな賞を受賞したことも多々ある。

彼女を取材した記者が防衛庁記者クラブ所属となり、これが彼女と自衛隊(航空幕僚監部)との出会いである。最初は航空自衛隊との関係が濃かった彼女だが、その輪が次第に海自・陸自にも広がっていき、現在では、『25 万人自衛隊のマドンナ』と呼ばれるようになった。

ブルーインパルスやコブラに搭乗した初の民間人女性でもある。訪問した駐屯地や基地は 160 余り(彼女の HP から)である。自衛隊関連の各機関紙、雑誌等に「見てある記」として、隊員や部隊の実情を女性らしい視点、暖かい眼差しで、精力的に執筆して貰っている。

最近では、幹部自衛官の修養誌である「修親」に「イギリス陸軍 見て歩き」を 3 回にわたって連載した(2003、6～8 月号)。好奇心旺盛な彼女ならではのエピソードも多く、家内共々吃驚するような話も幾つか聞いたが、それを書くのは小生の任にあらず。

世界一周の豪華客船で弾き語り等することも多く、上陸したら防衛駐在官夫婦が街を案内してくれると言う。世界各地に彼女のファンは多い。

歌にコンサートに、作詞・作曲、執筆そして陸・海・空自衛隊の取材活動とその見聞録の執筆等々、マルチな才能をフルに発揮して活躍中である。

細部については、「<http://www.bouei.com/hikari/prof.html>」で確認して下さい。

彼女の肺活量は幾らあるか? 優に 4,000CC を超えていると言う。歌の為に就寝前の腹式呼吸の訓練は、例えお酒を飲んでいても決して欠かすことはないし、一般の人にとっても有益だから、時々呼吸を停止して脳の活性化を図ることと併せてやったらどうでしょうかと推奨している。

II 小生並びに第5師団との係わり

小生が練馬に勤務している時に、彼女に師団の弁論大会の審査員として参加して頂いた。その時が彼女との初の出会いである。非常に味のある講評をして頂き、頭の良い方だと言うのが印象であった。その後、ラッパ競技会にも審査員として参加して頂いた。爾来の縁である。

第五師団との関係は鹿追から始まっている。10年位前から3回ほど鹿追駐屯地曹友会の取材に訪れ、鹿追でコンサートを開催したこともある。7年程前には、釧路駐屯地の年忘れコンサートに招待され参加した。

新しいところでは、平成13年に第5特科連隊で新隊員教育を取材し、朝雲新聞に掲載された。今年の3月には美幌駐屯地での第5音楽隊のファミリーコンサートにゲストとして出演して貰った。その際に、帯広に来て貰って、久々に再会したという次第である。目がクリクリとして、何時までたっても若くて妙齢な彼女であった。

III 今回の部隊訪問

帯広地方連絡部が主催実施する募集広報の一環として、十勝管内での[防衛大学校吹奏楽部のコンサートや中・高生に対する演奏指導等]が実施された。同吹奏楽部の部外顧問を務めている彼女も、防大生に同行し、彼(女)等の指導を行うと共に併せて第5師団及び帯広駐屯地の取材を行うこととなったものである。

既に到着当日の夜に音楽隊等による歓迎会で、あの一見かぼそい(?失礼)体の何処から、あんな声量が出るのだろうかと言うような歌を披露して貰った。防大吹奏楽部の音更町でのコンサートに向けての練習に余念ない学生に対し、聞いた話であるが、非常に厳しいけれども実には的確な指導をされたようである。厳しさは防大生に対する愛情の発露でもある。

施設大隊が軽門橋と漕舟競技会を開催すると聞くや直ちに取材に出かけるという行動力を発揮した。7日には、特科連隊の訓練状況取材し、夜には駐屯地の夏祭りに防大生と共に参加して、熱唱し、盆踊りに参加した隊員・その家族及び駐屯地周辺の地域の方々の絶賛を浴びた。